

南京から見る芥川龍之介の中国観 ——「江南游記」を中心に——

謝 銀萍

はじめに

本稿は「南京の基督」（『中央公論』、1920.7）と「江南游記」（初出『大阪毎日新聞』、1922.1-2）の「南京」を取り上げ、南京の描写を考察することで、新たな視点から芥川龍之介の中国観を明らかにすることを目的としたものである。

「南京の基督」は芥川龍之介が中国旅行をする前に発表したものである。この作品は谷崎潤一郎の「秦淮の夜」（『中外』、1919.2）に示唆を受けて書いた作品である。中国人の少女金花を主人公とし、基督を登場させることで、キリシタン物と中国物という両方のカテゴリに入れられることが興味深い。作品が発表されてから一年も経たないうちに、想像により構築された南京の街を実際に体験する機会が芥川に訪れた。それは1921年の中国旅行であった。

1921年3月19日に芥川は東京から出発し、風邪のため大阪に一時泊まり、28日に筑後丸に乗船し、門司から上海へと向かう。30日の午後、上海に着いてから観光を始める。中国での観光ルートは上海、杭州、蘇州、揚州、南京、蕪湖、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津の順である。南京を訪れたのは5月12日から14日で、二泊三日であったが、実際の観光時間はわずか一日ほどであったようだ。⁽¹⁾ その間、芥川は江南貢院、秦淮河、夫子廟、明孝陵といった南京の代表的な名所旧跡に足を運び、後にその体験を「江南游記」の「南京」（上、中、下）に綴り、『支那游記』（改造社、1925.11）に収録して出版した。このように、南京を舞台とする作品を二つ作り、とりわけ南京旅行が短かったにもかかわらず、詳細に文章化していることから、芥川と南京とは緊密な関係を持っていることが明らかである。

芥川の中国旅行というと、これまでの研究は上海や北京での体験に焦点を当てて芥川の中国観を読み取ろうとする傾向が強い。⁽²⁾ それ以外の都市での体験、とりわけ想像の世界と現実の社会を往復した南京に対する芥川の姿勢は看過されてきた。南京は「楚の金陵邑、秦の秣陵、呉の建業、晋の建鄴、建康、南唐の西都江寧府、宋の建康府、明の應天府にして、永樂帝の都を北京に移すや、正統六年此地を南京と號し、留都又は陪都とし、清に至りて江寧府といへり」⁽³⁾ と記されるように長い歴史を持つ都である。近代になると「鴉片の乱の結果たる南京条約の締結地たり、長髮賊の首脳洪秀全の十年間の居城たり、劉坤一の鎮する所たり、清末革命の激戦地たり、臨時大統領孫逸仙の總統府たりし處にして、寧、津浦兩鐵道の連絡点たり、その史跡として、その商工業地として、重要な位置を占むるや知るべきなり」⁽⁴⁾ と近代化の波に強くさらされた町でもある。つまり、南京は二つの顔を持っている。西洋化が上海ほど進んではない、と同時に、北京に劣らないほどの文化的な厚みを持っている。

以上指摘してきたことを踏まえ、本稿では南京と芥川文学に着目し、彼にとっての南京の意味について論を試みる。繰り返しになるが、芥川の中国観を検討する上で最も重要なテキストとされる『支那遊記』では、「上海遊記」や「北京日記抄」以外はまだ十分に論じられていない。その中で、本稿では『支那遊記』の「江南遊記」に収録される「南京」(上、中、下)をピックアップし、詳しい検討を試みる。芥川文学における南京の表象を分析することで、芥川にとっての中国の意味を解明することを目的とする。

I. 「南京の基督」の考案について

芥川文学における南京というと、「南京の基督」が最も知られている作品である。この作品の考案について、芥川自身は附記の中で、谷崎潤一郎の「秦淮の夜」を参照したと記してある。「秦淮の夜」は谷崎潤一郎自身の1918年中国旅行に基づき、ある夜中、「私」が南京の街で探検して娼婦を探し回る経験を振り返る作品である。「南京の基督」と「秦淮の夜」の相違について、すでに河泰厚は

以下のように指摘している。

『秦淮の夜』と読み比べると分かるように、場所を同じく南京の奇望街に設定して、その中の娼婦の部屋の様子から服装、例えば、女の部屋の中のうす暗い置きランプ、きたない壁、テーブルと椅子、藤の寝台と毛布、寝台をかくした帳や、翡翠の耳輪や西瓜の種等、ほとんどがそのまま描かれている。また秦淮の孔子廟や利涉橋の飯館や彫刻のある柱、紹興酒、画舫という小道具は、ほとんど谷崎潤一郎の『秦淮の夜』から借りている。⁽⁵⁾

谷崎の作品から題材を借りることに異議を申し立てることはない。しかしながら、「南京の基督」（傍点は筆者、以下同）というタイトルが興味深い。谷崎の「秦淮の夜」では特にキリスト教関連のモチーフは見られない。「秦淮の夜」の描写にヒントを得て南京に関する具体的なイメージを想像したことは明らかだが、キリストと関連づけることへいかに辿り着いたかが不思議に思われる。つまり、なぜ「南京」のキリストなのだろうか。本節では、「南京の基督」の考案について考察を試みる。

関口安義は「切支丹物の舞台を中国南京に設定したのはなぜだろうか。先輩谷崎の小説によっても刺激されただろうが、この時期の芥川には中国への深い興味・関心があったと思われる」⁽⁶⁾と指摘している。「中国への深い興味・関心」は確かに一つの理由として納得できるが、彼の中国趣味が学生時代から培われてきたものである事に注意を払わなければならない。⁽⁷⁾ また、「南京の基督」以前に芥川はすでに「酒虫」（『新思潮』、1916.6）、「黄粱夢」（『中央文学』、1917.10）、「英雄の器」（『人文』、1918.1）といった中国古典に取材した作品をいくつも出している。ゆえに、「南京の基督」を考案する際に、それまで熟成してきた中国への関心が蘇っていたことは当たり前だと言わなければならない。

しかし、南京とキリストを結びつける試みは新鮮で、多少ともロマンチックか

つエキゾチックなイメージを読者に与えるのである。これだけの理由であったと考えるににくい。そこで、「春の長崎旅行の余熱が残る中で、彼は中国へ思いを馳せていたのだ」⁽⁸⁾ という、芥川が中国に抱いた関心についての関口安義の指摘に手がかりがあると考えられる。ここで言う「春の長崎旅行」は1919年5月4日に菊池寛と共に長崎に出かけた旅を指す。その旅について、菊池寛は「半自叙伝」のなかで、「これは私にとっても芥川にとっても記念すべき旅行だった。この旅行前にも芥川はキリシタン物を書いていたが、この旅行によって、更にこの方面の興味が増ったように思う」⁽⁹⁾（下線は筆者、以下同）と振り返っている。つまり、長崎旅行はキリストへの芥川の興味をいっそう促したと思われる。他方、芥川は自宅宛の絵葉書で、長崎への印象を以下のように語っている。

長崎へ来た 永見さんの厄介になつた 長崎はよい所にて甚感服す
支那趣味と西洋趣味と雑居してゐる所殊に妙なり 異人、支那人多勢
 ある町は大抵石だたみ 橋は大抵支那風の石橋ロオマ旧教のお寺が三つ
 ある皆可成大きい昨日その一つ（大浦の）へ行きガラシーと云ふフ
 ランスの坊さんと小半日話したりかへりに町を歩き掘出し物をした故そ
 ちらへ送る 以上⁽¹⁰⁾

「支那趣味と西洋趣味と雑居してゐる所殊に妙なり」という長崎のエキゾチックな雰囲気は芥川に印象深かったようである。長崎にある「支那」と「西洋」の併存は、「南京の基督」に仕掛けられる中国人少女とキリストが同時に登場する〈中国と西洋〉の構造を彷彿とさせる。長崎はかつて日本が外国と連絡する数少ない通商口の一つであり、西洋や中国からの影響が強く、街全体には異国情緒が漂っている。とりわけ、キリスト教が最も早く伝来する町として、その歴史が長い。「南京の基督」という小説の考案にたどり着くプロセスを考えると、長崎において西洋のキリストと中国の風情を同時に体験できたことは大きな契機であつたろうと推測できる。1919年の長崎旅行によりキリスト教への興味や異国趣味

が高まっていた事情を視野に入れると、「南京の基督」の誕生は偶然ではないと断定できる。

上に論じてきたように、南京を舞台にしたのは直接には谷崎の作品に刺激を受けたからである。が、それと相まって、内的には長崎旅行により高まっているキリスト教への興味が創作の動機であったと指摘できる。つまり、このような内外の要素が相互に働きかけたからこそ、南京とキリスト教を結びつける「南京の基督」が誕生したわけであろう。

II. 想像の世界たる南京に見られる現実への目

前節では、芥川がなぜ「南京の基督」の舞台を南京にしたかという作品の誕生のプロセスを考察してきた。そこで本節では、想像の世界として構築されている南京が「南京の基督」においてどのように描かれているのかについて検討を行なう。

「南京の基督」は、体を売ることで生計を立てる中国人少女宋金花、日米混血児、日本人の若い旅行家、この三人の登場人物をめぐって、「南京奇望街の或家の一間」という閉じられた空間の中で展開する話である。実際、南京の街の風景については直接的な描写が殆どない。わずかに南京に関する描写が見られるのは、金花の目を通して間接的に描かれる断片だけである。

彼女の椅子の後には、絳紗の帷を垂れた窓があつて、その又窓の外には川があるのか、静な水の音や櫂の音が、絶えず此処まで聞えて来た。それがどうも彼女には、幼少の時から見慣れてある、秦淮らしい心もちがした。しかし彼女が今ある所は、確に天国の町にある、基督の家に違ひなかつた。⁽¹¹⁾

これは金花の夢に出てくる南京の様子である。金花は部屋にきた外国人と一夜を過ごす中、キリストに関する夢を見ていた。そこに現れてきた南京は、金花が

「幼少の時から見慣れている」風景であった。静かな川の流水の音や、小舟を揺らぐ櫓が水を叩く音、平和な風景であり、今の騒がしい世間とは縁の遠い空間である。金花の記憶にある昔の秦淮はいかにも穏やかであり、その風景と南京とが重ねられている。

しかし、今の南京がどのようなになっているのか。金花が幼少期から見慣れていた秦淮の風景はすでに時代の移り変わりに応じて変わってきた。以下のような描写からその片鱗が窺える。

「この間肥つた奥さんと一しよに、画舫に乗つてゐた人かしら。いやいや、あの人は髪の色が、もつとずつと赤かつた。では秦淮の孔子様の廟へ、写真機を向けてゐた人かも知れない。しかしあの人はこの御客より、年をとつてゐたやうな心もちがする。さうさう、何時か利涉橋の側の飯館の前に、人だかりがしてゐると思つたら、丁度この御客によく似た人が、太い籐の杖を振り上げて、人力車夫の背中を打つてゐたつけ。事によると、——が、どうもあの人の眼は、もつと瞳が青かつたやうだ。……」⁽¹²⁾

この文はある日の夜、楊梅瘡を患う金花の部屋に知らない外国人の男が駆け込んできた際に、この酔っぱらった外国人の正体について、金花が脳裏で今までの見聞を振り返る描写である。ここでは、敬虔なキリスト教信者である彼女が孔子のことを恭しく「孔子様」と呼ぶ描写にいささかの違和感を感じないことはない。「基督様」と「孔子様」を同時に登場させることにより、南京の神秘的でエキゾチックな雰囲気を読者に感じさせる。

画舫に乗る髪が赤い外国人、秦淮の孔子様の廟の写真を撮る外国人、太い籐の杖で人力車の背中を打つ外国人という金花が会った様々な外国人により、南京における西洋勢力の進出が前景化されている。画舫に乗っている赤髪の外国人は恐らく秦淮を遊覧していたのであろう。孔子廟に写真機を向けている外国人は観光

客に違いない。これらの西洋人の享楽の姿と、うす汚い部屋の中で売春してかろうじて生きている金花の境地とは対照的なものになる。また、人混みの中で、人力車の車夫が青い瞳の西洋人に打たれるという場面に中国民衆と西洋人との上下関係が象徴されている。アヘン戦争や第一次世界大戦などを経て、欧米諸国の進出により圧迫される中国社会の様相や、国際社会における中国と欧米列強との勢力関係がこの断片から窺える。一方、写真機が十五歳の少女金花のような中国の下層民衆まで認知されていたことから、西洋の機械文明の普及及び中国に進出する西洋勢力の徹底ぶりが示唆されている。芥川の描いた南京は「月の映える美しい秦淮川、そのほとりの遊郭、汚れのない少女の娼婦というイメージが生き生きと空想の世界で踊らされていた」⁽¹³⁾ というロマンチックな空間とは言い切れない。やはり金花の目に写っている南京のイメージに、しっかりと社会現実を見つめる芥川の姿勢が内包されていることが分かる。

もちろん、南京に関するそれらの情報は部分的に谷崎の「秦淮の夜」から得られたものだと考えられる。そのほかには、新聞雑誌⁽¹⁴⁾ や他の遊記⁽¹⁵⁾ も有力な情報源として読まれていたに違いない。同時期の中国では、第一次世界大戦の影響により、国内では学生運動、いわゆる五四運動が勃発し、外交的には西洋の進出が加速していた。対外問題を抱えながら、国内の南北が対立し、不安定な状況であった。中国のこのような現実が日本の新聞によりリアルタイムに日本国内に報道されていた⁽¹⁶⁾。

「南京の基督」では、芥川はこれまで憧れてきた中国像を託そうとしていながらも、すでに現実への目が備わっていた。「南京の基督」というタイトル、そして少女金花像の構築により、谷崎の「秦淮の夜」から受け継いだエキゾチックな感覚が伝わってくる一方、背景としての南京の表象が顕在化するようになった。金花の目を通して昔と今の秦淮の相違が浮上し、近代化の流れに巻き込まれる南京の変遷が記された。従って、「南京の基督」について、「あくまで詩的精神を追求する芥川にとって、人生観や社会問題はさほど興味あるものではなかった」⁽¹⁷⁾ という指摘は適当ではない。「南京の基督」では、長崎旅行から繋がる異国趣味

に秘められている「詩的精神」と共に、社会問題に立ち向かう覚悟がすでに芥川にあったと強調したい。

III. 南京の秦淮河へ投じる故郷への視線

「南京の基督」では、想像の世界という前提の下で南京の神秘的な様子が構築されている一方、その社会現実注目する芥川の姿勢を確認することができた。幸いに、「南京の基督」が掲載されたすぐ後に、芥川は中国旅行を実現し、南京をはじめとする江南地区を旅することができた。が、芥川は体の調子のせいで南京に滞在する時間が短くなり、予定通りには観光できなかったのは前述の通りである⁽¹⁸⁾。南京での見聞が「江南游記」の二十七から二十九までの「南京」(上・中・下)に綴られているが、詳しく取り上げられているのは江南貢院や孔子廟を含む秦淮河沿岸と、明の孝陵二箇所の名所旧跡に限られている。そこでまず、本節では同時代の南京旅行記を踏まえながら、秦淮河⁽¹⁹⁾がどのように芥川の目に映っていたのかについて考察を試みる。

宮坂覺編の年譜⁽²⁰⁾によると、芥川は1921年5月12日の午後南京に着いたとのことだ。時刻は遅いにもかかわらず、彼はすぐ南京城内の観光に出かけた。「西洋建も交つた」南京の「城内の五分の三は、阜や荒地になつてゐる」⁽²¹⁾と聞かされた芥川は「路側の柳だの、崩れかかつた土塀だの、燕の群だのを眺めながら、懐古の情を催」⁽²²⁾した。靴屋の様々な靴が「夕明りの中に並んでゐるのは、妙に美しい気がしない事もない」⁽²³⁾と前向きな心境を示している。片目眇の気味の悪い主人を見かけても、その「ロマンティックな気」が相変わらず消えなかった。⁽²⁴⁾このように、現実の南京に対する芥川の第一印象は決して悪いものではない。むしろ「懐古」のよい対象として受け入れられている。

さて「南京」で特筆された秦淮河の景色がどのように描かれていたか。かつて秦淮河近辺は「南京の基督」の舞台として描かれ、「静な水の音や櫂の音」が絶えずに聞こえてくる平和で静かな場所とされていた。しかし実際、現実の秦淮河はどのような風景であるのか。

「橋上より眺むれば、秦淮は平凡なる溝川なり。川幅は本所の豎川位。兩岸に櫛比する人家は、料理屋藝者屋の類なりと云ふ。人家の空に新樹の梢あり。人なき畫舫三四、暮靄の中に繋がれしも見ゆ。古人云ふ。「煙籠寒水月籠沙」と。這般の風景既に見るべからず。云はば今日の秦淮は、俗臭紛紛たる柳橋なり。

「水畔の飯館に晩飯を喫す。一流の料理屋の由なれども、室内は餘り綺麗ならず。木彫りの菊にペンキを塗れる柱、西瓜の種の散亂したる板敷き、拙き水墨の四君子の軸、——畢に今日の支那料理屋は、味覺以上の何物をも満足せしめざる場所なるべし。食事は八寶飯佳。勘定は祝儀共二人前三圓二十錢。食事中隣室に胡弓の音あり。歌聲又次いで起る。昔は一曲の後庭花、詩人をして愁殺せしめたれど、東方の遊子多恨ならず。青黒き玉子を頬張りながら、微醺を帯びたる案内者と、明日の予定を談ずる事多時。

「飯館を出づれば既に夜なり。家家の電燈の光、妓の人力車に駕せるを照す。宛然代地の河岸を行くが如し。されど一の姝麗を見ず。私に疑ふ、「秦淮畫舫録」中の美人、幾人か懸け値のなきものある。もし夫「桃花扇傳奇」の香君に至つては、獨り秦淮の妓家と云はず、四百餘州を遍歴するも、恐らくは一人もあらざるべし。……」⁽²⁵⁾

金花の夢にあった南京とは雲泥の差で、俗っぽい雰囲気は漂う。実際この時期、日本人の間では南京は「不潔」な町として評判が悪かった⁽²⁶⁾ ようである。「木彫りの菊にペンキを塗れる柱、西瓜の種の散亂したる板敷き」といった記述からも南京の「不潔」さを一瞥することができる。「煙籠寒水月籠沙」⁽²⁷⁾、「後庭花」⁽²⁸⁾、『秦淮畫舫録』⁽²⁹⁾、『桃花扇傳奇』⁽³⁰⁾ といった中国の古詩詞に描写されていた風景はどこにも見られないようである。「現実の奇望街に来て、一年前に懐いていたイメージは粉々に打ち壊され」⁽³¹⁾ て、南京の現実に失望する芥川の気持ち

が読み取れる。

一方、同時代に南京を訪れた他の日本の文人がどのように秦淮河を記していたのか。大正期の日本人の間における南京の知名度は「支那旅行中での一大憧憬の標的と取り扱」⁽³²⁾ われているほど高かった。いうまでもなく南京に関する旅行記⁽³³⁾ もたくさん刊行されている。

門を出て一足すると、所謂秦淮の畫舫は、狭い沈滞した溝水の上に列んで居る。畫舫其のものは稍目新しいとしても、腐敗した汚水の臭は僕達にはとても鼻持がならぬ、罷り出る商女の姿も大抵は想像がつく。「煙籠寒水月籠沙」の杜牧の詞も来て見れば臺なしだ。而して亡国の恨を知らざるもの豈獨り商女のみならんやだ。⁽³⁴⁾

余等此一種不潔にして混雜なる奇怪の光景に驚き、数年前の湊川し、即ち楠公神社境域の極めて卑俗なる遊園たり市場たりしの光景を回顧し、聖賢俊傑の雅俗に共通し清濁を併呑するの度量、古来東西相同じくして対照の妙を極むるに感じつつ、倉皇馬首を回して帰途に上る。畫舫甚だ美ならずと雖も、酒家妓樓の門に掲ぐる聯詠は、宛も春花の朝陽に開くの趣あり、更に幾多の遺跡あり、かの李白の…詩に名高き鳳凰臺は、今一小花園と化せるを聞く。……余は……復此臺を訪うて再び失望を繰り返すの愚を学ばず。⁽³⁵⁾

……六朝の繁華一時にあつまり管弦歌唱の中、花の如き佳人と才子とがここに遊びここに嘯いたことは事実である。さほどの場所も、さて来てみれば聞くより低し富士の山。水は清からず、地は幽邃ならず、僅に彩られたる画舫と高く聳ゆる文星閣とは當年の繁華を物語つてゐるが、其の他の趣は、てんで詩中のものとは別物である。⁽³⁶⁾

同時代の旅行記を読んでもみると、芥川より容赦なく現実の南京の汚さを暴く赤裸々な描写が多くあることが分かる。さらに、「眼前の生の中国に対して、古典文学の中の中国を意識的に見つけ出したり、重ねたり」⁽³⁷⁾しようとする芥川の姿は同時代の日本人に共通していると指摘できる。やはり、南京に対する認識は、杜牧の「泊秦淮」や「後庭花」の詩歌によって生成した部分が大きいのであろう。芥川の「胸中に秘める江南的中国像は、言うを俟たず、もっぱら読書により得たもので」⁽³⁸⁾あり、彼が憧れていた中国は「どことなく『江南』的な中国と言えるのではあるまいか」⁽³⁹⁾と指摘された通りである。この「江南的」な中国像は芥川だけでなく、同時代の日本人にも共有されている。

しかし一方、秦淮河に関する芥川の描写には他の日本人に見られない特徴がある。その一つは南京に対する失望の気持ちである。「てんで詩中のものとは別物」、「腐敗した汚水の臭は僕達にはとても鼻持がならぬ」、「不潔にして混雑なる奇怪の光景」という他の日本の文人が示唆した露骨な怒りに対して、芥川は「俗臭紛紛」、「平凡なる溝川」と批判しただけである。明らかに、現実の南京に対して芥川は控えめな姿勢を取っている⁽⁴⁰⁾。

また、秦淮の風景を失望とともに描く際に、自分の生まれ育った土地の原風景を参照することは芥川ならではの特徴である。今日の秦淮が「平凡なる溝川」で、「俗臭紛紛」とはいえ、親しんできた本所の堅川や柳橋の面影を想起したことは明らかである。それだけでなく、食堂や人力車で賑わう秦淮の夜景に「代地の河岸」が思い出された。このように、他の日本人の描写に比べると、故郷へのまなざしを重ねることは特筆すべき点である。単援朝は『支那遊記』の北京について、「芥川の中では、北京は『西洋』の対極に置かれている、心の癒される故郷のような存在である」⁽⁴¹⁾と論じた。南京に生まれ育った土地の風景をなぞらえる行為から、ここでの北京を南京に置き換えても成立するのであろう。故郷の原風景を連想する描写は管見の限り、『支那遊記』における他の地域の描写には見当たらないのである。まさに「『支那遊記』の一卷は、中国という他者の鏡像に映った日本が描出されたテキストとしても読める」⁽⁴²⁾と論じられたように、秦淮

河を描く部分は南京という他者を通して故郷の風景を相対化する構図が成り立っていると指摘できる。

豎川、柳橋や代地、また本所両国あたりは芥川が愛する大川の近隣であり、子供の時から親しんできた場所である。「大川の水」において、芥川は「この大川の水に撫愛される沿岸の町々は皆自分にとって、忘れ難い、なつかしい町である。吾妻橋から川下ならば、駒形、並木、蔵前、代地、柳橋、或は多田の薬師前、うめ堀、横網の川岸——何処でもよい」⁽⁴³⁾と愛情に溢れる告白をしている。この辺りは東京の下町であり、明治時代に入ってもなお江戸時代の名残を強く漂わせている。明治生まれの芥川にとって、このような伝統的な風情は鮮やかに記憶に刻まれたに違いない。江戸文化を表徴する隅田川と同じように、南京の秦淮河沿岸は中国の王朝更迭、栄華盛衰を見守り、伝統文学を象徴する高度に洗練された空間である。旧文化を育む場という性格が秦淮河と隅田川は共通しているわけである。

水と文学の空間を象徴する⁽⁴⁴⁾以外に、両者にはもう一つの共通点が見られる。それは近代化の歩みにより伝統文化を象徴する原風景が破壊されつつある点にある。特に「今日の秦淮は、俗臭紛紛たる柳橋なり」という芥川の文句は、成島柳北『柳橋新誌』（初編と二編は1874年出版）を想起させる。この作品は初編が江戸の柳橋の風俗を描くもので、二編は明治初期の柳橋を舞台に、日本の文明開化を風刺し戯画化したものである。近代化により失われていく伝統風景を惜しむ柳北の気持ちは全編を貫いている。一方、中国では20世紀に入ってから、西洋諸国の進出が加速した。1920年代の中国国内における軍閥混戦は西洋諸国間の勢力争奪戦でもある。地方の軍閥は欧米や日本の支持を得て中国国内で横行していたわけである。政治に敏感な芥川は上海で章炳麟、李人傑などの有識者と会談したため、このあたりの事情を承知していたのであろう。このような近代化の事情の背後に、「古雅な地」である南京にまで資本主義の進出に伴って変容せざるをえなく徐々に「俗悪な」地になりつつある。中国の近代化とは異なり、日本は積極的に西洋化を推進していたとはいえ、現れた影響は似ている。つまり、

柳橋のような江戸風情の溢れる伝統空間が余儀なく変わっていくことである。このように、秦淮河と隅田川は共通点を持っており、繊細で感受性の高い芥川は十分にそれを認識している。従って、破壊されつつある秦淮の風景を批判的に見ているのは、単なる南京に対しての印象だけでなく、江戸情緒が消えつつある隅田川への懸念に繋がっていると解釈できよう。芥川にとって南京旅行は恐らく故郷を相対化する旅でもあったに違いない。「新芸術家の眼に映じた支那の印象」において、芥川は中国の南の風景について「丁度日本の景のそれに似て比較的支那的気分が薄かったのであります」と語っていた。⁽⁴⁵⁾ 南京の秦淮河に豎川、柳橋や代地の川岸という生まれ育った土地の風景を見出す視線はその裏付けであろう。

前述のように本節では、同時代の南京旅行記を踏まえながら、芥川が記した秦淮河を考察した。憧憬の気持ちから来る現実の南京に対する幻滅を表明した同時代の日本人とはやや異なり、芥川は古典の文学的空間と大きなギャップを持つ秦淮河の現実を見つめて冷静な姿勢を示した。彼には失望があったが、現実を格別厳しく批判はしなかった。却って、目に映る風景に生まれ育った土地の原風景を重ね、秦淮を通して本所両国辺りを観察しようとしていた。このような秦淮河に関する描写を通して、故郷に類似している南京に対する芥川の相反する気持ちを垣間見ることができる。

IV. 明の孝陵に催される明清文化への親しみ

さて、南京の歴史を最も象徴する明の孝陵について、芥川はどのような感想を抱いたのであろうか。これまでの研究では「南京」を論じる際に秦淮河に焦点を当てて「平凡なる溝川」、「俗臭紛紛たる柳橋」というマイナスの表現に注目する一方、「清朝の昔を偲ぶに足る旧蹟」とされる明の孝陵に対する芥川の視線を見過ごしていることが指摘できる。そのため本節では、明の孝陵に対する芥川の描写について考察を行う。

一時間の後、我我二人は、鐘山の陵に至るべき、堂堂たる石橋を渡

つてみた。孝陵は長髪賊の乱の為に、大抵の殿樓を焼かれたから、何処を見ても草ばかりである。その離離とした草の中に、大きい石の象が立つてあたり、門の礎が残つてゐたりするのは、到底奈良の郊外の緑無に、銀の目貫の太刀を下げ佩いた公子を億ふ所の寂しさぢゃない。現にこの石橋にしても、処処の石の隙間に、薊の花が咲いてゐるのは、その儘懐古の詩境である。私は吐き気をこらへながら、鐘山の松柏を仰ぎ見ては、六朝の金粉何といふ前人の詩を思ひ出さうとした。⁽⁴⁶⁾

明朝の建築芸術の集大成とされている明の孝陵は南京紫金山の麓にある明祖の洪武帝朱元璋の墓であり、明朝の繁昌を象徴し、南京の歴史を語る代表的な史跡である。芥川が訪れた当時、「南京では、太平天国の乱に破壊を被った多くの史跡が、半世紀以上経ってもなお復旧されずにいた」⁽⁴⁷⁾ 状態である。言うまでもなく明の孝陵も被害を被った。上にある「孝陵は長髪賊の乱の為に、大抵の殿樓を焼かれたから、何処を見ても草ばかりである」という芥川の記述からその荒廃が想像できる。けれども、詩文と大きなギャップを持ち落荒れた孝陵の現実を目にして、芥川は辛辣な視線を示したわけでもなく、驚いた気配さえなかったようである。却って日本の奈良の寂しさとは異なる、「懐古の詩境」を感じ取り、「吐き気をこらへ」ながら、「六朝の金粉何」の詩を思い出そうと積極的な姿勢を取ろうとしていた。要するに、厳しい現実にはロマンチックな視線を寄せ、「本の中の世界と現実とのギャップにとまどっている」⁽⁴⁸⁾ 様子は見えてこない。

其処には屋根も柱もない、赤壁だけがぐるりと残つてゐる。あたりに生え伸びた若木や草、壁一面の落書の跡、——荒廃はやはり変わりが無い。しかしこの陵上に立つて見ると、紛紛と飛び交ふ燕の下に、さつき渡つた石橋は勿論、正殿、郭門、薄白い陵道、——その他日の光に照つた山河が、遙かに青青と広がつてゐる。⁽⁴⁹⁾

これは明孝陵の主たる建築の一つである方城明楼を描く部分である。「荒廢はやはり変わりがない」という「やはり」からは明孝陵全体の衰退ぶりが分かる。けれども、このような「荒廢」した光景に芥川は気持ちを損なうことがなかった。「日の光に照つた」明の孝陵の荒れた風景は却って「紛紛と飛び交ふ燕の下に、さつき渡つた石橋は勿論、正殿、郭門、薄白い陵道」などの「山河が、遙かに青青と広がっている」ように明るく描かれている。春らしい生命の躍動感が「紛紛と飛び交ふ燕」の忙しい囁きによりありありと伝わってくる。また「青青」という色は春の色であり、まさに万物が伸び伸びと成長する生命力を示唆する表現として受け止めるべきである。その「青青」とした生命は遠くまで「広がっている」ことに、無限な開放感を覚えずにはいられない。このように、明の孝陵の満目蕭条を訴えずにあえて明るく詠えることにより、芥川の詩的精神はもちろん、彼の晴れ晴れしい気持ちが浮上してくる。

明らかに、このような明るい明の孝陵の風景は芥川の内的な心象風景を写し出すものでもある。特に「その他の日の光に照つた山河」という表現を象徴的に読み取るべきである。つまり、正殿、郭門や陵道といった類の具体的な物でなく、明代に対する抽象的なイメージとして注目すべきである。明というと明孝陵のような立派な建築以外に輝かしい文化遺産が挙げられ、明清文化をなす重要な財産として定着している。明清時代に誕生した小説や詩歌の多岐にわたる文化遺産は中国文学史を飾り、いつまでも異彩を放っている。特に中国古典文学の集大成とされる四大奇書⁽⁵⁰⁾は、まさに「遙かに青青と広がっている」ほど影響力を持ち、日本を初めとする海外文学に深く受容されているカノンである。『西遊記』、『水滸伝』、『三國志演義』はいずれも明の時代に誕生した秀作であると言われている。そのほかにも、世界中に名を知られている艶書『金瓶梅』も明の中期に刊行された作品である。注意すべきなのは、これらの明清古典と芥川文学とは緊密な関係を持っていることである。

子供の時の愛読書は「西遊記」が第一である。これ等は今日でも僕の

愛読書である。比喩談としてこれほどの傑作は、西洋には一つもないであらうと思ふ。名高いバンヤンの「天路歷程」なども到底この「西遊記」の敵ではない。それから「水滸伝」も愛読書の一つである。これも今以て愛読してゐる。一時は「水滸伝」の中の一〇八人の豪傑の名前を悉く諳記してゐたことがある。その時分でも押川春浪氏の冒険小説や何かよりもこの「水滸伝」だの「西遊記」だのといふ方が遙かに僕に面白かつた。⁽⁵¹⁾

10月19日 石田幹之助 田端から（葉書）

道程の無事を祈る

Obscene Book は外になかつたら石印の一番やすい金瓶梅を買つてきてくれ給へ

右おねがひ旁々送別の爲に

青鞋のあとをとどめよ高麗の霜⁽⁵²⁾

引用文が示すように、芥川は『西遊記』や『水滸伝』の愛読者である。『金瓶梅』については、作品の中だけでなく書簡でも度々触れ、強い購買欲を示した一冊である⁽⁵³⁾。実際に彼はそれを入手することに成功し、愛読書としていた。これらの中国古典のカノンとして誇るべき明清文学は、芥川文学の血肉と言える。明孝陵の荒廃な風景を目にした芥川はいささかも皮肉の口ぶりを示すことはなかった。却って、「日の光に照つた山河が、遙かに青青と広がっている」とその雄大さを賞賛している。これは方城明樓の巨大な規模を誇るだけでなく、最も明清文化の幅広い影響力を示唆する描写である。太陽に照らされた文化の山河の下に、明清文化のエッセンスを吸い取る芥川文学が含まれていると考えられる。

前述したように、自ら確かめた南京に対して、芥川はその現実を見つめながら冷静な態度を示している。秦淮河の「不潔」にせよ、明の孝陵の「荒涼」にせよ、南京では芥川は始終上海ほど不満を表すことはなかった。その代わり、南京

の文化的な内面を積極的に描き、その分厚い歴史の蓄積を表現しようとしていた姿勢が確認できた。特に、秦淮河に生まれ育った土地の風景を連想する行為、明孝陵の「荒廢」を皮肉せずに明るく描くことから、芥川の南京に対する親近感が明らかに読み取れる。

おわりに

本稿では南京を旅する以前に書かれた「南京の基督」と、旅の経験を記す「南京」(上、中、下)を取り上げ、芥川文学における南京の意味について考察を行った。上に論じてきた通り、南京の描写に至っては、芥川は町の風景描写に専念していることが分かる。⁽⁵⁴⁾

南京を旅行する以前の「南京の基督」では、想像の世界として穏やかでエキゾチックな南京像が構築されていたものの、主人公金花に語られる描写から、南京の現実の状況がある程度まで意識されていた。しかも、その時点で芥川が注目した南京の現実には西洋の影響が大きかった。その後、南京を旅する芥川は相変わらず社会の現実を見定めていたが、ただ西洋化した面でなく、本来の南京らしい部分に焦点を当てていた。詩文と大きなギャップを持つ南京の痛ましい現実を目撃した芥川は上海での厳しい態度から一変し、「いつも冷静に醒めた目で、〈ジャーナリスト〉らしく、その現実のみを見つめている」⁽⁵⁵⁾のである。彼はロマンチックな精神を発揮し、現実とは離れている古典の世界を抽出することに努めようとしていた。特に、秦淮河を通して故郷を相対化する言説には、西洋化による現実の深刻さを自覚しつつ、過ぎ去った伝統文化へのノスタルジアが示唆されている。明清文化を象徴する明孝陵を目の前にした芥川は現実の齟齬を乗り越え、古典を仰ぐ気持ちを解放し、積極的な態度で向き合っていた。

出発前に抱いていた南京に対する幻想は目に入ってきた現実に次々と打ち砕かれていったと言われてきたが、そうでもないことが分かる。南京の現実にショックを受けたものの、同時に古典文学の場として体験することもできた。芥川にとって、南京はただの異郷ではなく、故郷に近い存在であり、その文学の誕生を

可能にする場として認識されていると考えられる。

芥川にとっての中国を意味づけるとき、上海や北京以外に南京を視野に入れるべきである。なぜならば、1920年代前後の中国には「前清時代の佛を伝へた、平和な、閑静な都会や田園と、映畫で見る西洋のそれに劣らない上海や天津のやうな近代都市と、新舊両様の文明が肩を並べて存在してゐた」⁽⁵⁶⁾からである。このように、南京への描写を分析することで、「下品な西洋」とされる上海とは全く異なる意味づけができ、詩文を通して構築してきた中国を不完全でありながら、南京旅行によってある程度まで確認できたと結論づけられる。

注

- (1) 二泊三日の旅程は次の通りである。一日目は日本人の友人の案内がなく、二日目になると体調が急に悪くなってしまい、莫愁湖といった南京の名勝地を見ずに、三日目に匆々と上海の里見の病院に戻った。二泊三日といっても、一日目の到着はすでに午後になっていたし、二日目の午後からは体調が優れずに、ホテルで休むことになったため、実際の観光時間は1日程度しかなかった。杭州や揚州での観光に比べると、半日ぐらい案内人が付き添っていない状況に加え、実に慌ただしかったこともあり、走馬看花のような旅だと言わざるをえなかった。(宮坂覺、2001年、pp.297-298)
- (2) 例えば、上海に関する先行研究においては、最新の研究として、周芷冰(2016)が挙げられる。他には、林颯君(2012)、和田博文(2001)などが挙げられる。北京に関しては、宋武全(2017)や単援朝(2004)などが代表的な研究である。
- (3) 小島晋治監修(1999)第14巻、p.280
- (4) 同上、p.281
- (5) 河泰厚(1997)p.93
- (6) 関口安義編(2003)p.455
- (7) 「愛読書の印象」(『文章倶楽部』、1920.8)で、芥川は「子供の時の愛読書は「西遊記」が第一である」、「それから「水滸伝」も愛読書の一つである」と告白し、幼い時から中国古典文学に親しんできたことが明らかである。また、関口安義の研究(『特派員芥川龍之介：中国でなにを視たのか』、毎日新聞社、1997.2)によると、芥川は江東小学校に入学するころから漢文を学び始め、早い段階で漢詩漢文に慣れており、一高時代から中国の書画に関心を持ち出し、様々な面から中国の伝統に傾倒することが分かる。
- (8) 関口安義(1999)p.404

- (9) 菊池寛 (1960) p.116
- (10) 芥川龍之介 (1997) pp.283-284
- (11) 芥川龍之介 (1996.4) pp.247-248
- (12) 同上、p.244
- (13) 関口安義 (1997) p.128
- (14) 例としては『朝日新聞』や『読売新聞』などが挙げられる。
- (15) 宇野哲人『支那文明記』(大同館、1912)、徳富猪一郎『支那漫遊記』(民友社、1918)、井上紅梅『支那風俗』(日本堂書店、1921)などが挙げられる。
- (16) 『東京朝日新聞』(1918年9月17日)にある「南北交渉説／南方へ特使を派遣 目下人選中なり／南京に和平会議／曹コン妥協的通電／唐継堯条件提出／軍政府内政部長更迭／馮氏と軍政府接近」、1918年12月23日「支那現勢／議和代表会議 二十九日南京に赴かん／徐総統議和問題附議／北方議和経過発表／伍朝枢上海派遣 北方と講和使節の交渉／李王福陝問題電照」といった見出しが示唆するように、中国の厳しい国内情勢がリアルタイムに日本に報道されている。
- (17) 邱雅芬 (2010) p.74
- (18) 「南京」(下)における芥川の記述によると、最初の計画としては莫愁湖を回る予定だったことが分かる。実際、江南貢院や孔子廟を含む秦淮河沿岸、明の孝陵だけを観光したと考えられるが、1921年5月16日に上海より小穴隆一宛に南京の観光名所烏龍潭の絵葉書を送ったことから、あるいは足を伸ばしたかもしれない。
- (19) 「南京」(上)においては、江南貢院についての描写があったが、本稿では考察の対象外としている。なお、江南貢院と孔子廟が秦淮河の側にあるため、これらの名所旧跡や近くの路地などを含めて秦淮河風景区と呼ばれていることを断っておく。
- (20) 芥川龍之介 (1998.3) p.148
- (21) 芥川龍之介 (1996.6) p.290
- (22) 同上
- (23) 同上、p.291
- (24) 「南京」(上)において、芥川は「大小さまざまな男女の靴が、夕明りの中に並んでゐるのは、妙に美しい気がしない事もない。おまけに帳場に立った主人は、色の白い、口もとの優しい、それだけに一層気味の悪い、片目眇の男である。私はちよいとロマンティックな気になりながら、出来合ひの靴を物色し出した」と語っている。
- (25) 同上、pp.293-294
- (26) 東洋文庫 (1980) p.62
- (27) 唐杜牧「泊秦淮」のことを指す。
- (28) 全集の注釈では「後庭花」を「前述の杜牧の「泊秦淮」をふまえる」と記述している。

るが、杜牧以前に南朝陳後主（陳叔宝）が「玉樹後庭花」という曲を作って、亡国の音とされていることに留意すべきである。

- (29) 『秦淮画舫録』は秦淮の芸者評判記である。
- (30) 『桃花扇伝奇』は1699年頃成立した清代の戯曲である。孔尚任（1648-1718）作。復社の文士侯方域と秦淮名妓李香君の悲恋を骨子とし、明清の興亡を描いた長編史劇。
- (31) 関口安義（1997）p.128
- (32) 小島晋治監修（1999）第15巻、p.257
- (33) その代表として本稿では、東京高等商業学校の『中華三千里』（大阪屋號、1920）、渡辺巳之次郎（1869-1924）の「老大国の山河一余と朝鮮及び支那」（初版：金尾文淵堂、1921年）、諸橋轍次の『遊支雑筆』（目黒書店、1938）の内容を引用した。
- (34) 小島晋治監修（1999）第10巻、p.113
- (35) 同上、第14巻、pp.289-290
- (36) 同上、第9巻、p.117
- (37) 張蕾（2007）p.267
- (38) 施小焯（2011）p.79
- (39) 同上
- (40) 南京に対する芥川の控えめな態度は上海に対する彼の描写との比較を通しても分かる。最も典型的な例は上海の湖心亭に関する描写である。「曇天にそば立った支那風の亭と、病的な緑色を拵げた池と、その池へ斜めに注がれた、隆々たる一条の小便と、——これは憂鬱愛すべき風景画たるばかりじゃない」と芥川の赤裸々な風刺が歴然である。
- (41) 単援朝（2004）p.27
- (42) 秦剛（2007）p.180
- (43) 芥川龍之介（1995）p.27
- (44) 芥川文学における水の表象について、金子佳高（2014）は「芥川龍之介文学において、水はしばしば、原初性を表すものとして活用されてきた」と指摘している上、永井荷風の「深川の歌」（『趣味』、1909年2月）に言及し、「〈水〉は失われた江戸情緒の象徴として活用されている」と論じている。本稿では、芥川が豎川などの隅田川の風景を連想したのは、両者ともに水に囲まれている空間という共通点を持っているからだと考えている。
- (45) 芥川龍之介（1996.6）p.3
- (46) 同上、p.295
- (47) 秦剛（2016）p.161
- (48) 関口安義（1997）p.129

- (49) 芥川龍之介 (1996.6) pp.295-296
- (50) 四大奇書とは、通常『紅樓夢』、『水滸伝』、『三国誌演義』、『西遊記』を指す。
- (51) 芥川龍之介 (1996.4) p.299
- (52) 芥川龍之介 (1997) pp.59-60
- (53) 『金瓶梅』について「戯作三昧」(『大阪毎日新聞』、1917)や「文芸的な、余りに文芸的な」(『改造』、1927)に触れられている。また、『芥川龍之介全集』第22巻に収録されている未定稿の中に戯曲「金瓶梅」が見られる。
- (54) 「上海遊記」では、芥川は町の風景と共にそこを生きている様々な国籍の人々にも深い興味を示した。「上海遊記」では芥川は「第一瞥」、「城内」、「西洋」などの節では上海の町風景を詳しく描いたが、同時に「章炳麟氏」、「南国の美人」、「鄭孝胥」、「李人傑氏」や「日本人」という小見出しが示唆するように、上海を生きているヒトに焦点を当てていた特徴が明らかである。それに対して、南京では芥川がもっぱらその町風景に関心を寄せていたと指摘できる。
- (55) 張蕾 (2007) p.300
- (56) 谷崎潤一郎 (1968) p.9

参考文献

- 芥川龍之介、『芥川龍之介全集』第1巻、岩波書店、1995
- .『芥川龍之介全集』第6巻、岩波書店、1996.4
- .『芥川龍之介全集』第8巻、岩波書店、1996.6
- .『芥川龍之介全集』第18巻、岩波書店、1997.4
- .『芥川龍之介全集』第22巻、岩波書店、1997.10
- .『芥川龍之介全集』第23巻、岩波書店、1998.1
- .『芥川龍之介全集』第24巻、岩波書店、1998.3
- 王書璋、「芥川が中国旅行に求めたもの：「北京日記抄」」、『千葉大学社会文化科学研究』11、2005、pp.A24-A35
- 小澤保博、「芥川龍之介『支那遊記』研究（上）」、『琉球大学教育学部紀要』75、2009、pp.35-47
- .「芥川龍之介『支那遊記』研究（中）」、『琉球大学教育学部紀要』77、2010、pp.1-27
- .「芥川龍之介『支那遊記』研究（下）」、『琉球大学教育学部紀要』78、2011、pp.1-26
- 金子佳高、「『南京の基督』論——中国を語ること——」、『文学研究論集』40、明治大学大学院、2014、pp.161-179

- 鹿兒島徳治、『隅田川の今昔』、有峰書店、1975
- 邱雅芬、『芥川龍之介の中国——神話と現実』、花書院、2010
- 菊池寛、『菊池寛文学全集』第8巻、文芸春秋新社、1960
- 小島晋治監修、『大正中国見聞録集成』第9巻、ゆまに書房、1999
- .『大正中国見聞録集成』第10巻、ゆまに書房、1999
- .『大正中国見聞録集成』第14巻、ゆまに書房、1999
- .『大正中国見聞録集成』第15巻、ゆまに書房、1999
- 河泰厚、「『南京の基督』考察」、『日本文学研究』32、日本文学研究、1997、pp.93-103
- 施小焯、「芥川龍之介における『江南』」、山田奨治、郭南燕編『江南文化と日本 = 江南文化与日本 = Jiangnan culture and Japan : 資料・人的交流の再発掘』、国際日本文化研究センター、2012、pp.75-86
- 周芷冰、「芥川龍之介「上海游記」論：「私」が見た「新しい」上海』、『人文論究』66(1)、2016、pp.21-35
- 秦剛、「支那游記——日本へのまなざし」、『国文学：解釈と鑑賞』72(9)、至文堂、2007、pp.179-186
- .「南京の記憶と日本近現代文学：芥川龍之介、石川達三、堀田善衛が描いた『南京』」、『芥川龍之介研究』第10号、国際芥川龍之介学会事務局、2016、pp.160-171
- 関口安義、『特派員芥川龍之介：中国でなにを視たのか』、毎日新聞社、1997
- .『芥川龍之介とその時代』、筑摩書房、1999
- 関口安義編、『芥川龍之介新辞典』、翰林書房、2003
- 宋武全、「芥川龍之介の北京観劇について」、『文化共生学研究』16、2017、pp.1-13
- 谷崎潤一郎、『谷崎潤一郎全集』第21巻、中央公論社、1968
- 単援朝、「芥川龍之介・癒しの東洋 (I) ——北京への『郷愁』を中心に——」、『崇城大学研究報告』第29巻第1号、崇城大学、2004、pp.27-37
- .「芥川竜之介『支那游記』の世界——夢想と現実の間』、『国語と国文学』68(9)、1991、pp.49-62
- 張蕾、『芥川龍之介と中国 受容と変容の軌跡』、国書刊行会、2007
- 豊島寛彰、『隅田川とその兩岸 (中巻)』、芳洲書院、1962
- 東洋文庫、『明治以降日本人の中国旅行記：解題』、東洋文庫、1980
- 成島柳北、『柳橋新誌』、岩波書店、1940
- 宮坂覺、『芥川文学の周辺』、翰林書房、2001
- 姚紅、『芥川龍之介文学における近代中国の都市空間』、筑波大学博士学位論文 (未刊行)、2012

林颯君、「芥川龍之介「上海遊記」論：〈私〉の中国観の変化を追って」、『芥川龍之介研究』(5・6)、2012、pp.161-174

和田博文、「芥川の上海体験」、『国文学解釈と教材の研究』46(11)、2001、pp.108-115

『東京朝日新聞』、1918年9月17日

Akutagawa's Outlook on China Through Nanjing: On the basis of *Kōnanyūki*

XIE, Yinping

This study examines the significance of Nanjing in Akutagawa's Literature. Akutagawa has written two works on Nanjing which typically showed his deep relationships with China. The previous studies scarcely focused on description of Nanjing. This paper suggested that Nanjing is unignorable aspect of Akutagawa's outlook on China.

This paper is a text analysis on *The Christ of Nanjing* (1920) and *Kōnanyūki* (1922). *The Christ of Nanjing* is a fiction which has been influenced by Junichiro Tanizaki's *Shinwai No Yoru* (1919). This novel is distinctive because it can be classified either as Christ story or Chinese story that differs from Akutagawa's other works. This study illustrates the reasons why he combined Christ and Nanjing and his imagination about Nanjing. Not long after he published *The Christ of Nanjing*, he had an opportunity to experience a real Nanjing. He came to China as a journalist from March to July in 1921, and this visit became his exclusive oversea trip during his all life. He recorded his feelings about Nanjing and published as one part of *Kōnanyūki*. His perspectives of the real society of Nanjing and his attitude towards Nanjing worth considering.

Firstly, in spite of the influence of Tanizaki, Akutagawa's trip to Nagasaki in 1920 with his friend Kan Kikuchi can be considered as an important factor that connected Christ and Nanjing. Kikuchi mentioned that the trip to Nagasaki enhanced Akutagawa's interest in Christianity. In addition, Akutagawa himself also revealed the same feelings in his letter. Specifically, the extoic atmosphere in

Nagasaki has been deeply affected by China and Europe. Even though he returned to Tokyo, the mixed culture in Nagasaki has been rooted in his memory. The two factors interacted which lead to the publication of *The Christ of Nanjing*.

Secondly, the preview studies of *The Christ of Nanjing* viewed Nanjing as an exotic city which was one-sided. However, Akutagawa did not describe Nanjing directly. Instead, he caught a glimpse of Nanjing through heroine Kinka's memory. Although *The Christ of Nanjing* is a fiction, Akutagawa deliberately sketched the real society of Nanjing which has been oppressed by Western power.

Thirdly, this paper focused on his feelings of Qin Huai River and Ming Tomb where he stayed in Nanjing. Akutagawa associated Qin Huai River with his hometown Sumidagawa district which indicated his closeness to Nanjing. Therefore, he felt disappointed when he saw the real Nanjing at the first sight, but his attitude was modest compared with other Japanese intellectuals. His last stop was Ming Tomb, a historic site in Nanjing. Despite the deserted landscape of Ming Tomb, Akutagawa wrote it in an objective, to be more specific, positive way. Ming Tomb was an epitome of the culture of Ming and Qing Dynasty which was a crucial part of Akutagawa's literature.

In conclusion, Akutagawa had a favorable impression towards Nanjing. Compared with his impression of Shanghai which focus on the people there, he showed a big interest in Nanjing's city feature. His imagination about Nanjing through Chinese classical culture had been partially verified. Thus, it is of vital importance to consider Nanjing when investigate the significance of China in Akutagawa's Literature.